

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名: 坂本 匡耀 所属: 北九州市立小倉総合特別支援学校 記録日: 2022年 2月 12日
キーワード: 肢体不自由、コミュニケーションの指導、書字の代替手段、スイッチコントロール

【対象生徒（Aくん）の情報】

・学年

中学部3年生の男子生徒（中学部 1 年の時より報告者が担任をしており、魔法の medicine の対象生徒でもある。）

・障害名

脳性麻痺（アテトーゼ型）、知的障害

本校の知的障害特別支援学校の教育課程に在籍している。

田中ビネー知能検査 V (R3.6.16) では、CAI4:8、MA8:0、IQ55+ α である。

・障害と困難の内容

発音の不明瞭さがあり、話したことが相手に伝わりづらい。その影響から会話が一方的になりやすい。また、四肢の麻痺や強い筋緊張を伴う不随意運動があり、書字をして勉強することが難しい。

・使用した機器に

iPad iPhone watch chromebook AI スピーカー Pepper

【活動目的】

今年度の目標

1. 他人とのよりよいコミュニケーションが取れるようになる。
 - ・相手のことを考えて、話す内容を工夫することができる。
 - ※今年度は代替手段の活用ではなく、音声言語の活用について焦点を当てた。
2. iPad を使った文字入力ができるようになる。
 - ・iPad を使い、文章を書くことができる。
 - ・相手に伝わるような表現で文を書けるようになる。
 - ・本人の疲れにくい方法で効率よく入力できるようになる。

さらに将来のイメージ

1. 自分の思っていることを分かりやすく伝えることができる。Aくんも相手も楽しめる会話ができる。
2. LINE 等の SNS を活用して楽しんでコミュニケーションをとることができる。

・実施期間

2021 年5月～2022年 2 月

・実施者

坂本 匡耀 (担任)

・実施者と対象生徒の関係

担任 (3年目)

【活動内容と対象生徒の変化】

1. コミュニケーションについて

○対象生徒の事前の状況

Aくんは、人と関わることが好きで、コミュニケーション意欲は高く、誰とも関わろうとすることができる生徒である。学校での休み時間はよくおしゃべりをして過ごしている。しかし、発音に不明瞭さがあり、言ったことを慣れていない人でないと聞き取ってもらえないことが多い。以前トーキングエイドを持っていたが、日常的な活用には定着してはならず、現在は使用している補助的手段はない。

Aくんのコミュニケーションを要求場面と日常会話場面に分けて分析した。将来を考えたときに、日常会話場面での改善が必要ではないかと考えた。Aくんにとって、相手もAくんも楽しめる会話をできる人が増えることがQOLの向上につながるのではないかと思います、日常会話場面に絞って指導目標を立てていった。

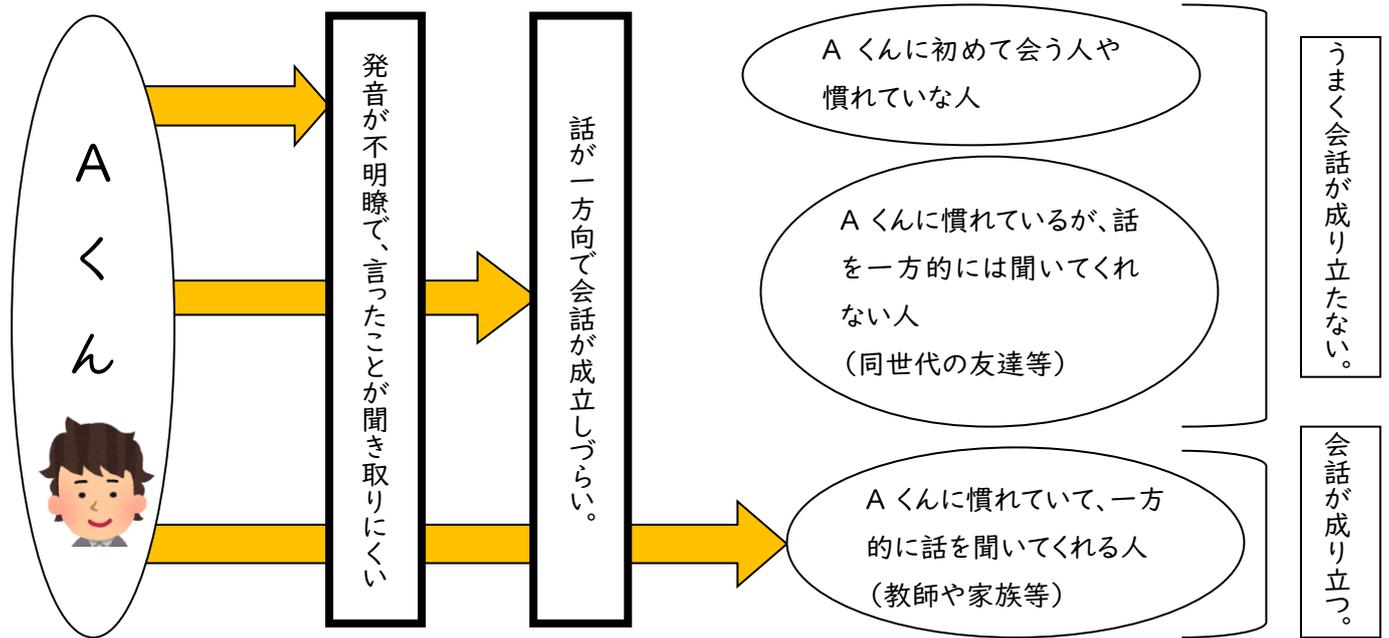
	要求場面	日常会話場面
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・発音が不明瞭で、言いたいことが伝わりづらい。 ・しかし、身振り、手ぶりを加えることで、伝わることも多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発音が不明瞭で、言いたいことが伝わりづらい。 ・文脈がつかめれば、言いたいことが伝わるが、思いついたことから話し始めるため、言いたい内容が伝わりづらい。 ・話が一方方向になりがち。
将来想定される姿	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉だけで通じづらくても、現在している、身振り手振りをうまく使えばやっていけるのではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話すだけか、聞くだけの、どちらか一方だけしか楽しみづらい会話になる。 →対等に楽しく会話できる相手が限られるのではないかと。



日常会話を改善すれば互いに楽しく会話ができる人が広がるのではないかと。

日常会話場面における、現在のAくんのコミュニケーション状態を分析すると、「発音が不明瞭で、言ったことを聞き手が聞き取りにくいこと」と、「話し方が一方的で会話が成立しづらいこと」の二つの壁があるのではないかと考えた。Aくん自身の改善が必要で、Aくんが主体的に取り組めそうな「話し方が一方的で会話が成立しづらいこと」に対して今年度の指導目標を立てて、実践を行った。

Aくんのコミュニケーションのイメージ



	発音が不明瞭で、言ったことが聞き取りにくい	話が一方向で会話が成立しづらい
将来想定される姿	・Aくんの言葉を聞きとれる人がその場その場で現れてくれるのではないかと。周りの人が慣れていくことで解消できるのではないかと。	・Aくんに慣れている人とも会話が盛り上がりづらい。 ・同年代の人と楽しい会話がしづらいのではないかと。 ・Aくん自身が工夫しないと改善しないのではないかと。
改善策と本人の主体性	・代替手段を使うことも考えられるが、話した方が早く伝わることや、身の回りに通じる人がいることからAくんは今の伝え方を選ぶのではないかと考えられる。	・現在も問題になる場面があることから、本人も課題意識をもって取り組むことができるのではないかと。 →Aくんにとって必要で、主体的に話し方の工夫に取り組めるのではないかと考えられる。



改善すると、Aくんも相手も互いに楽しい会話ができるのではないかと。

【今年度の指導目標】

1. 他人とのよりよいコミュニケーションが取れるようになる。

・相手のことを考えて、話し方を工夫することができるようになる。(音声言語の活用での話し方の検討)

Aくんの考えを確かめるために事前にコミュニケーションの意識に関するアンケートを行った。(8月27日実施)アンケートの質問項目は、Aくん実態をもとに担任が作成した。アンケートは担任との授業でインタビュー形式にて行った。各質問に5段階(できる5→4→3→2→1できない)でAくんが回答した。

・言いたいことが伝わるかについて

	自分の言葉を聞き取ってもらえているか	自分の伝えたいことが伝わるか	言いたいことが伝わらなくて困るか
家族	5(聞き取っている)	5(伝わる)	5(全く困らない)
担任	5(聞き取っている)	5(伝わる)	5(全く困らない)
同じクラスの先生	4(大体聞き取っている)	3(ときどき伝わる)	5(全く困らない)
クラス以外の先生	2(あまり聞き取ってもらえない)	2(あまり伝わらない)	4(ほとんど困らない)
友達	4(大体聞き取っている)	4(大体伝わる)～3(ときどき伝わる)	5(全く困らない)

同じクラスの先生や友達では、聞き取ってもらえるかより、伝わっているか項目で評価が下がっていた。話の文脈が、つかみづらいため聞き取ってもらっても、伝わりづらいという状況が生じているのではないかと推測した。また、家族から友達までで、聞き取ってもらえるか、伝わるかの評価にはばらつきがあったが、伝わらなくて困るかの評価は困らないと答えていた。周りが耳を傾けてくれることが多かったり、話したい状況や話さないといけない必要性が少なかったりするためではないかと考えた。

・会話のスキル(言葉の使い方等)について

質問	回答
言葉をうまく使えているか。	1(できていない)
言葉を適切な順番で話せているか。	2(あまりできていない)
会話の中で、適切なタイミングで話せているか。	2(あまりできていない)
人によって話す内容をうまく選択できているか。	4(まあまあできている)
会話の時に意識していることはあるか。	唾をのむ。
会話がうまくいくポイントはどんなことがあるか。	分からない。
どんな人なら話が弾むと思うか。	分からない。

伝わっている場面でも繰り返し言うことがあるが、なぜ、何回も繰り返して言っているのか。	伝わっていないと思うから。
そのような場面で相手の返事を聞いているか。	聞いている。

全体的に会話のスキルについては、できていないと感じていることが多いようだった。また、どうやったら会話がうまくいくかについても、あまり考えたことがないようであった。

何度も繰り返し言うことについては、発音が不明瞭なことから、周囲に伝えないといけないという意識が強くなり、話すことに集中してしまっているのではないかと考えた。その結果、相手の話を聞くことに意識を向けることができず、一方的な会話になっているのではないかと推測した。

・将来のいろいろな人とコミュニケーションをしたいかについて

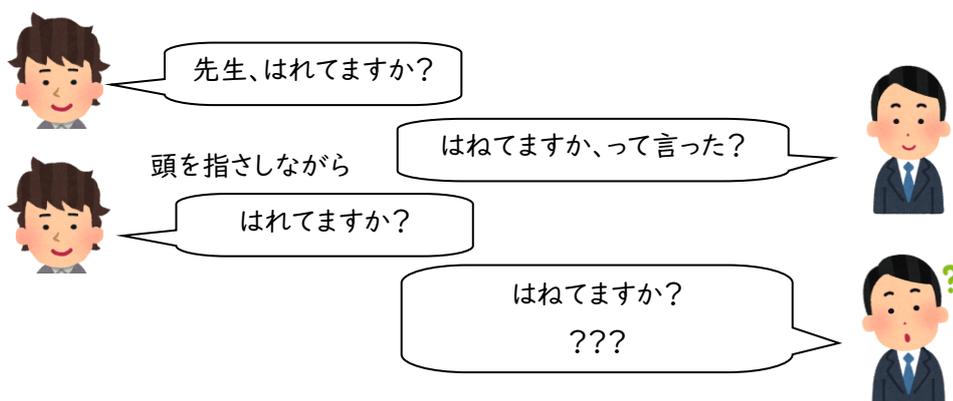
質問	回答	備考(その他の発言など)
友達	4(ややしたい)	会話を楽しむ目的でしたい。
家族	5(したい)	しないと困るのでしたい。
職場や施設の人	3(どちらでもない)	会話を楽しむこともする必要もあまり感じないが全くしないわけにもいかないと思う。
新しく出会う人	1(しなくてよい)	全く必要性を感じない。

会話を楽しむ目的で話したい相手は、友達しか思い浮かんでいない様子であった。また、家族は会話を楽しむ目的より必要性が高いため、しなければならぬだろうと感じている様子であった。職場や施設の人や新しく出会う人とのコミュニケーションについては、しなくてもよいと断言している様子であった。全般的に将来や学校生活以外の生活の場面を想像しづらく、将来のコミュニケーションに対して、魅力や必要性をあまり感じていない様子であった。

アンケートの結果から、Aくんが会話をするに対して意識があまりなく、どうすればよいかわからないことが問題であると考えた。また、現在困り感や必要性を感じていない部分も、問題であると考えた。そのため、Aくんが自分の困りに気づき、将来を見据えてモチベーションをもってコミュニケーションの改善に取り組めるように計画を立てた。さらに、Aくんが会話をうまくするために、必要なことを自分で気づいていけるように計画を立てていった。

○活動の具体的内容

ある日の昼休みに、Aくんと担任でこのような会話があった。



Aくんは、「はれてますか」と前日家でぶつけた頭がはれていないかを担任に尋ねたかったようだったが、直前まで髪形について話をしていたことや、前日の出来事を知らなかったことから、担任には「はねてますか」と聞こえて髪がはねていないかを尋ねていると推測した。Aくんに担任の状況を伝え、実際にAくんがしたように頭を指差して「はれてますか。」とやってみせると、「確かに「はねてますか。」に見える。」と言葉が足らずうまく伝わらなかったことに気付いた。

この出来事から、Aくんに相手に伝えることが上手くなるために、コミュニケーションの改善に取り組まないかと持ち掛け

ると、「やりたい」と前向きであったため、Aくんととのコミュニケーションの改善が始まった。Aくんにコミュニケーションを改善するための意識していきたいことを尋ねると、上記の出来事から「単語だけで言わない。」こととAくんが日頃から課題と感じていた「分かりきったことをしつこく言わない。」ことの2つを自身で目標として設定した。

また、後日このような会話が担任とAくんの間であった。

下校時、他の先生とぶつかりそうになった場面で



〇〇先生とぶつかりそうになっていたけど大丈夫？

先生、グリーンコープが来ました！

……



なんできたんですかね???



この会話をAくんに振り返ってもらくと、「全然違ったことを言っている。」「だいぶますい。」と会話がかみ合っていないことに気付けたようだった。また、その原因について考えてもらうと「相手のことを聞いていなかったから。」と分析することができた。これを改善するために、Aくんが新たに「相手の話をよく聞いて、それに合った答えをかえす。」という目標を立てて、コミュニケーションの目標に加えた。

Aくんが自身で設定したコミュニケーションの目標

- ・単語だけで言わない。
- ・分かりきったことをしつこく言わない。
- ・相手の話をよく聞いてそれに合った答えをかえす。

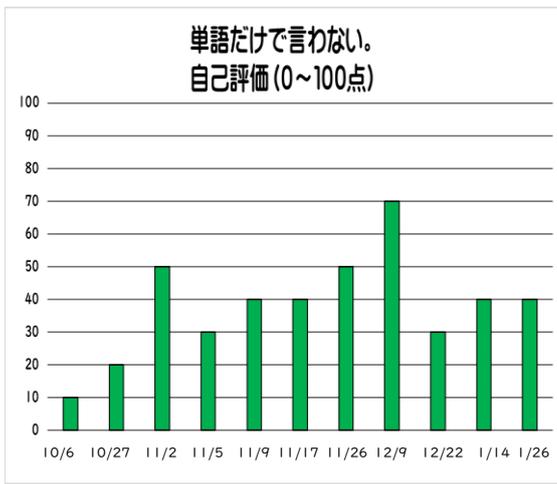
この2つ目標を意識して生活をしていき、定期的に自立活動の時間に振り返りを行い、評価、改善をしていった。振り返りでは、目標に対して100点満点で採点（10回中10回できていれば100点、10回中5回できていれば50点）を行い評価していった。Aくんが目標に対する自己評価した後、担任からの評価を伝えて、点数を決めていった。また、できていた部分とできなかった部分を尋ね、それぞれ理由を考えて、改善につなげられるようにした。また、前回までの結果をグラフにしてAくんに提示することで、成長の成果を感じながら取り組めるようにした。

また、国語の授業で、詩の朗読発表会があった。言葉の途中で息継ぎをしていたことで言葉が聞き取りにくくなっていた。そのことをAくんに伝えると、原稿に線を引いてほしいと要望があったので、文節ごとに線を引いた。息継ぎのタイミングを気を付けて読むことができ、担任以外の先生からも聞き取りやすいと褒めてもらうことができた。それ以降、発表やあいさつの際には原稿に線を引くようにAくんから依頼してくるようになった。

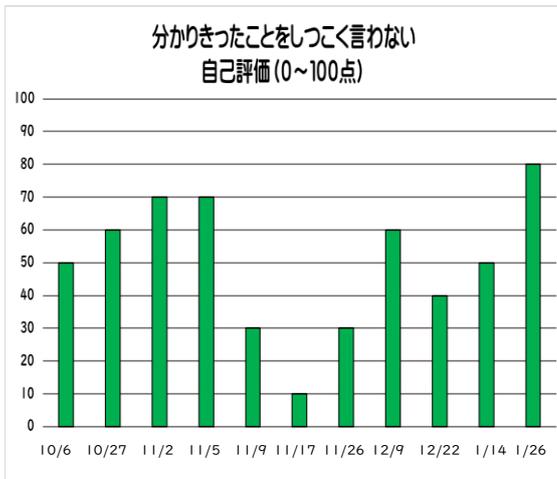
○対象生徒の事後の変化

どの目標もコミュニケーション場面で常に意識する様子が見られた。日常でうまくコミュニケーションが成り立たない場面で、以前は会話が成り立っていないことにAくんは気付かずだったが、コミュニケーションの改善に取り組んでからは、会話がうまくいっていない場面で、自分でうまくいっていないことに気付けるようになった。会話が上手くいっていないと「あっ」「あの目標ができていませんね。」と3つの目標を思い出し、何が原因でうまくいかなかったかに気付いて言い直す場面が多く見られた。

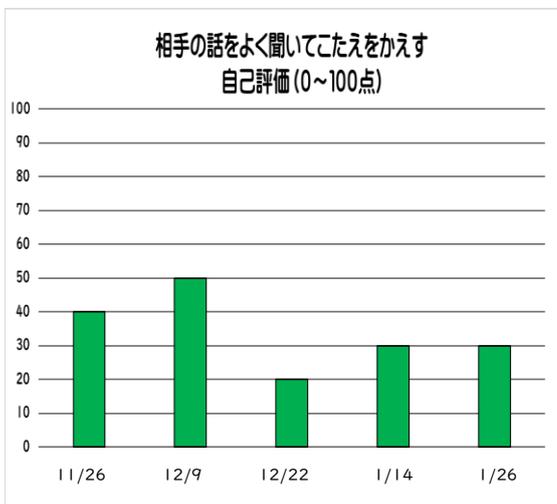
振り返りでは、Aくんと担任で話し合いをしながら、日常のコミュニケーションの様子を点数化することができた。点数は上がった、下がったりしていたが、できたこととできなかったことをそれぞれ客観的に考えることができた。



日付	点数	A くん の 気 付 き
10/6	10 点	・担任には気を付けることが、できたが他の場面はできなかった。
11/17	40 点	・休み時間はできたが、授業中話すときにできていなかった。
12/9	70 点	・会話の途中で単語だけで言っていて伝わっていないと気付けた。
12/22	30 点	・会話の始めは意識できた。しかし途中から単語で話すことが多くなってしまった。
1/14	40 点	・何かを説明するときは、できていた。でも、思いついたことを伝えるときにできなかった。



日付	点数	A くん の 気 付 き
10/6	50 点	・先生たちには気を付けることができた。 ・友達にしつこく言ってしまった。
11/5	70 点	・1回言ったら言わないことを意識できた。
11/17	40 点	・何かを頼むときにできなかった。
12/9	60 点	・言いたい気持ちが勝って、しつこく言うてしまうことがあった。
1/26	80 点	・日頃からしつこく言わずに生活できた。



日付	点数	A 君 の 気 付 き
11/26	40 点	・前より意識できるようになった。 ・話しかけられたときできないことがあった。
12/9	50 点	・答え方は意識できた。 ・話を聞くことができなかった。
12/22	20 点	・相手の話を耳に入っても頭で考えることができていなかった。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

>何がうまくいったのか？人に伝えたいエピソードを教えてください。

コミュニケーションの目標を立て、それに対しての定期的な振り返りを通してコミュニケーションの改善を図った。3つの目標を立てる際に、A くんの実際にあった会話を取り上げて目標を考えた。自分がした会話を客観的に見たことで、相手の視点に立って A くん自身が問題に気づくことができた。またその気づきから自分で目標を立てることができた。自分の言葉で目標を立てたことで、意識しやすく継続的に主体的に取り組むことができたのではないかと思います。

また、Aくん自身がコミュニケーションの改善に対して必要性を感じてモチベーションをもって取り組めるように、Aくんと将来の生活についての話を多くした。事前のアンケートの結果から Aくんは具体的な将来のイメージはできていない様子だったが、友達と会話を楽しむことはしたいと話していたので、将来の友達との会話場面を想定した話をした。「(同世代の)友達と将来楽しく会話したくない?」「そのとき、どうしたらいいかな?」と Aくんに投げかけながら活動を行ったことで、「このままじゃ困る」「頑張らないと」とAくんもモチベーションをもって取り組めた。Aくんから「今度振り返りはいつしますか。」と尋ねてきたこともあり、Aくん自身も必要性を感じて取り組めていた。

Aくんの振り返りでの評価は、自身で目標を達成することができたことと評価するには至らなかった。しかし、振り返りの際に、具体的な気づきが増えていることから相手に伝わりやすくすることを意識できるようになったのではないかと思う。特に「分かりきったことをしつこく言わない。」の評価は、後半上がっている。これは、Aくんの意識が高まってきた結果ではないかと思う。これまでは、担任がコミュニケーションについて話をしても Aくんが理解しづらかった部分も実践の後半では理解して考えることができるようになってきた。日常生活でも、Aくん自身が周囲に指摘されなくても、3つの目標ができていないことに気づき修正することができた。これはAくんにとって大きな成長ではないかと思う。Aくんは、「できない→気づく→分かる→できる」の「分かる」の段階にいないのではないかと思う。自分で問題が分かって修正できている Aくんなら卒業後も相手を意識したコミュニケーションの改善を行っていいのではないかと思う。

うまくいった理由と ICT の役割を教えてください。

Aくんの実態から Aくんに寄り添って実践を行ったことで、コミュニケーションの改善ができたのではないかと思う。今回の実践は ICT をあまり使わなかったが、今後 Aくんが相手に伝わりやすいようにしたという気持ちをもってコミュニケーションに取り組んでいけば、困ったときに必要とする自分にあった ICT 等の補助手段を主体的に効果的に使用できるのではないかと思う。

○エビデンス (具体的数値など)

事前に行ったアンケートを事後にも行い(2月2日実施)、同様の質問を Aくんにした。その結果、会話の時に意識することや、会話がうまくいくために必要なことに関する質問に大きく変化があった。

質問	事前の結果	事後の結果
会話の時に意識していることはあるか。	・唾をのむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・しつこく言わない。 ・単語だけで言わない。 ・相手の話をよく聞く。 ・話に合った答えを返す。 ・言葉の途中で声が小さくならないようにする。
会話がうまくいくポイントはどんなことがあるか。	・分からない。	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の話をよく聞く。 ・単語だけで言わない。 ・しつこく言わない。 ・大きな声でゆっくりと言う。 ・言葉の切れ目を意識する。
どんな人なら話が弾むと思うか。	・分からない。	<ul style="list-style-type: none"> ・会話のキャッチボールができる人。 ・相手の話をよく聞く人。 ・それにあつた答えを返してくれる人。

事前のアンケートでは、1つしか答えられていなかったり、分からないと答えていたりした項目が、事後のアンケートではコミュニケーションの3つの目標を中心に相手に伝わりやすいことを意識した回答ができていた。また、昔の自分と比べてどうかと Aくんに尋ねると「昔の自分は全く意識していなかったが、今の自分は意識して、ちょっとできるようになっている。」と答えていた。アンケート等からも Aくんの中の意識の変化を感じられた。

・その他エピソード

入学試験に向けた、面接練習の中で、「今頑張っていること」という質問に対して「コミュニケーションの目標を頑張っている。」と答えていた。また、「高等部で頑張りたいこと」という質問に対しては「人とうまく関わる勉強がしたい。」と答えていた。Aくんの中で、将来うまく会話ができるようになりたいと感じて、取り組めている結果なのではないかと思う。

12月にあった生徒会交代式で、Aくんがあいさつをする機会があった。iPadでAくんが書いた文を使って発表原稿を作ると、「言葉の切れ目で線を引いてください」と依頼があった。線を引いた原稿を渡すと、iPadのボイスメモを自分で開き、自分のあいさつを録音して確かめながら昼休みの時間いっぱい練習をしていた。交代式では、はきはきと伝わりやすくあいさつをすることができた。自分がどうすれば相手に伝わりやすくなるかを自分で考えて実践することができた。

2. 文字入力について

○対象生徒の事前の状況

Aくんは、麻痺や強い筋緊張を伴う不随意運動があり書字したり、キーボード等の操作をしたりすることが難しい。そのため、授業ではAくんが言ったことを教師が代筆を行い学習してきた。

○活動の具体的内容

(1) 入力方法の検討

iPadでの文字入力に取り組んだ。Aくんといろいろな方法を試しながら、やりやすい方法を探っていった。Aくんの実態から50音表キーボードへのタップ、フリック入力、スイッチコントロールの3種類の入力を試した。それぞれの方法で入力を行い、やりやすさを比べていった。3種類の方法を試した後で、Aくんと話し合いスイッチコントロールでの入力を選んだ。

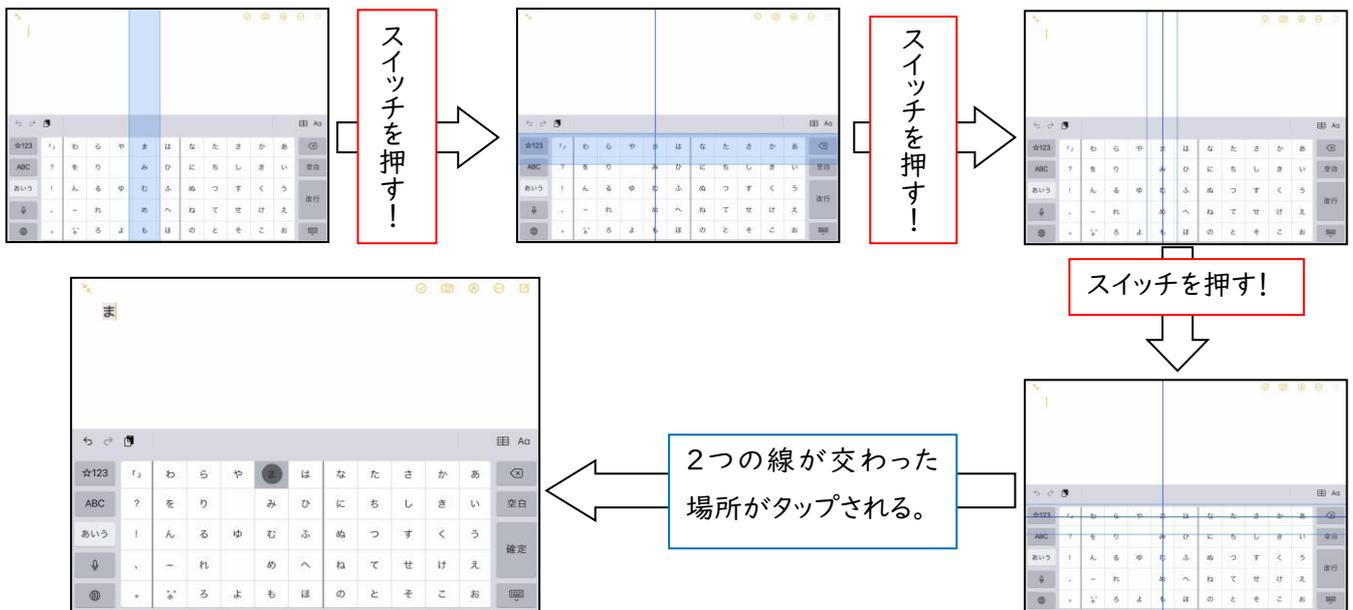
入力方法	メリット	デメリット
50音表キーボードへタップでの入力 (とても時間がかかった)	・一文字を打つことが早くできる。	・キーボードの枠が大きく、手を動かして入力しないといけない。 ・不随意運動の影響から、間違いが多くなってしまい、書いては消すことの繰り返しになってしまう。
フリック入力 (かかった時間はスイッチコントロールとほぼ同じ)	・一文字打つことが早くできる。 ・キーボードの枠が小さいため、手を大きく動かさなくて済む。	・不随意運動の影響から、間違いが多くなり、書いては消すことの繰り返しになってしまう。 ・特に予測変換をするときに間違いが多くなる。 ・指先を動かすことに集中するため疲れやすい。
スイッチコントロールで入力 (かかった時間はフリック入力とほぼ同じ)	・書き間違いが少なく、確実に打てる。 ・指先のスイッチ操作のみなので疲れにくい。	・一文字打つのに時間がかかる。



スイッチコントロール(ポイントモード)での入力

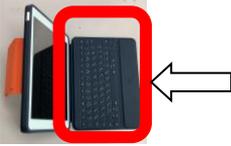
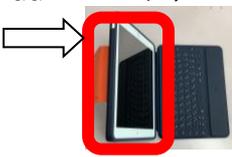
「スイッチコントロール」とはiPadのアクセシビリティ機能の一つで、iPadに接続したスイッチを操作することでiPadのすべての操作が可能になる機能である。スイッチに入力するとハイライト(枠 or 帯)が表示され、ハイライトを動かすことでアプリの起動や文字入力などのジェスチャができる。

本実践では帯のハイライトを操作する「ポイントモード(グライドカーソル)」を使って文字の入力を行った。ポイントモードでは、左右に動く帯と上下に動く帯をそれぞれスイッチを使って操作することで、2つの帯の重なったところをタップできる機能である。



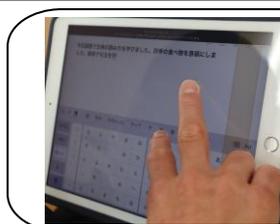
(2) スイッチの検討

次にスイッチコントロールを操作するスイッチについてAくんがやりやすいものを探った。スイッチは外部スイッチ、学校端末のiPadカバーについている外付けキーボード、iPadのフルスクリーンの3種類を行った。試した結果、Aくんの「これが一番いい。」という発言もありフルスクリーンを用いたスイッチで文字入力を選んだ。

スイッチ	入力の仕方	試した結果
外部スイッチ (棒スイッチ) (ジョグルスイッチ※押し具合を調節できるスイッチ)	スイッチを押すことで作動する。	<ul style="list-style-type: none"> ・反応が悪く、押してから作動するまでに時差が生じる。 ・スイッチを押すことに力が入りすぎる。 ・連続で押すことが難しい。
iPadカバーの外付けキーボード 	決められたキーを押すことで作動する。(複数のキーをスイッチとすることも可能)	<ul style="list-style-type: none"> ・1つのキーをスイッチと設定すると、キーが小さく狙って押すことが難しい。 ・複数のキーをスイッチと設定すると、同時にスイッチを複数押してしまうことになり、意図しない操作が起きる。
iPadのフルスクリーン 	画面をタップすることで作動する。	<ul style="list-style-type: none"> ・タップして作動するまでに、時差が生じない。 ・画面が広いのでタップできる場所も大きい。



本人が一番やりやすいスタイル(フルスクリーンスイッチを使い、スイッチコントロールで入力するAくん)



本人と選んだフルスクリーンスイッチを使ったスイッチコントロールでの文字入力を、毎日の連絡帳の日記コーナーの記入と、係活動で月2回程度の学級新聞の作成の主に2つの場面で活用していった。

○連絡帳での日記コーナーの記入

連絡帳の日記コーナーに1日の出来事や感想を書く活動を、iPadで行った。AくんがiPadのスイッチコントロールを使い一人で書いた内容を、担任が連絡帳に転記した。給食前や下校前の時間を使って日記を書いていた。文の入力のみであったため、iPadのメモアプリを使用して書いていった。



使う言葉が重複することも多いため、よく使う言葉は担任がユーザー辞書に登録しておき、短い入力でも予測変換に出るように設定しておいた。

(ユーザー辞書に登録した言葉)

- ・先生や友達の名前
- ・教科の名前
- ・「しました。」「できました。」「楽しかった。」等の述語。

○係活動での学級新聞の作成

iPadのMicrosoft Wordのアプリを使って、学級新聞を作成した。写真や吹き出しの選択、挿入の操作はAくんの考えを聞いて担任が行い、それ以外の文の入力についてはAくんがスイッチコントロールを使って行った。



○対象生徒の事後の変化

iPadを使ってAくん一人で文字入力を行うことができた。連絡帳の日記コーナーの記入は、ほぼ毎日行うことができた。出来事だけでなく、自分が感じたことを交えて、相手に伝わるような表現で文を書くことができた。記入の際には、予測変換をうまく活用していた。約100文字の記入をするのに20分~30分くらいかかるペースで記入できた。

日記の記入例(一部抜粋)と学級新聞の例

今日数学で、分数の学習をしました。2問間違えました。またがんばります。...

今日は、朝〇〇さんから話しかけられました。しあわせでした。.....

今日国語で、古典について勉強しました。これからもっと勉強していきたいです。...

今日数学で長さ調べをしました。iPadの測定アプリを使って測りました。だけど正確に測れているか気になります。.....



自分で文の入力を行ったことでいろいろな間違いが判明した。Aくんはこれまで耳で覚えることばかりで、書いて覚える経験がなかったので、間違えて覚えている単語が多くあった。特に促音や拗音が含まれている単語は多く間違えていた。単語だけでなく、文でも助詞や助動詞を間違えたりしていることが多かった。間違いがあった場合は、Aくんと確認をしながら、正しい言葉や文に修正していった。

(間違えていた単語の例)

(文の間違いの例)

(正) (誤)
・フォーク → ホオク
・いっしょに → いしよに
・ボッチャ → ボチャ

(正) (誤)
・おしずもう → おしずも
・じゅぎょう → じゅぎよう
・ビデオ → ビレオ

(正) (誤)
・先生にしてもらった。 → 先生がしてもらった。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

>何がうまくいったのか？人に伝えたいエピソードを教えてください。

iPad を使ったことで、これまで入力が難しかった A くんが文字入力をするのができた。A くんが自分で文を書いたことで、間違えて覚えている単語や、間違えて書いている文があることが分かり、それについて学習を進めることができた。

また、A くんがモチベーションをもって活動できるように、将来の活用について話を行った。将来 A くんは、LINE で友達と連絡をとりたいという希望があったため、そのときに相手に伝わるような文を打てるようになることを目標に活動を行った。そのことで A くんもモチベーションをもって、文の入力をするのができた。また、間違いに対しても前向きに改善に取り組むことができ、自分から文の修正を依頼することもあった。今後文字入力を A くんは将来の活用につなげたい。

>うまくいった理由と ICT の役割を教えてください。

今回使用したスイッチコントロールは、iPad の既存のアクセシビリティ機能で、設定が簡単であったことがよかった。また、操作方法も分かりやすく、A くんもすぐに理解して使うことができた。さらに、フルスクリーンスイッチを用いていたことで、スイッチを含めて iPad 1 台のみで入力ができるため、設置も簡単であり、持ち運びも便利で使いやすかった。スイッチコントロールモードの起動を、iPad のホームボタンをトリプルクリックで行った。簡単に起動することができ、担任以外の教師に頼んで起動をしてもらうこともできた。

iPad を活用したことで、これまで難しかった A くんが一人で文を書くことが実現できた。これによって、各教科の学習でも A くんが自分で考えて文を書くことができ、活動の幅が広がった。本市に導入された GIGA 端末も iPad であることから、高等部進学後も継続的な使用ができることも見込まれている。

>うまくいかなかった事とその理由を教えてください。

スイッチコントロールを使用したことから、入力が時間がかかってしまった。そのことから A くん自身が疲れてしまったり、つらい姿勢での入力になったりした。A くんは体の状態にあわせて、より使いやすいセッティングを今後も検討していく必要があると思う。また、今回はフルスクリーンをスイッチとして使用したため難しかったが、バックスペースキー等頻繁に使うキーについては、別にスイッチを接続する等工夫ができれば、入力時間の短縮ができるのではないかと思う。

・その他エピソード

高等部の見学会が 7 月と 12 月にあった。2 回とも事後学習で感想文を書いたが、7 月は、一言しか書けなかった。しかし、12 月は 100 字程度の文で感想を書くことができた。本人の意識の変化もあるが、文を書く活動を積み重ねたことで、自分の考えを文にすることができたのではないかと思う。

国語の学習で、おススメの本の紹介文を書く活動で、iPad を使った入力を行った。これまでは、教師が尋ねながら代筆していたため、教師の支援が入ることで、主体的に文を作成することに課題があったが、iPad を使うことで、A くんが考えて 1 人の力で文を作ることができた。そのため、これまでできなかった文の書き方についての指導が可能となった。